

おたまじゃくしぞうきんプロジェクト 2

—京都教育大学附属桃山小学校における活用実践の成果と課題—

井上えり子¹⁾・榊原 典子¹⁾・藤田 加代²⁾

Tadpole Dustcloth Project 2:
Results and Problems of Practice at the Momoyama Elementary School
Attached to Kyoto University of Education

Eriko INOUE, Noriko SAKAKIBARA and Kayo FUJITA

抄 録：2007年9月に本学附属桃山小学校の全児童を対象として、おたまじゃくしぞうきん(OZ)を活用した清掃活動を実施した。2007年12月にアンケート調査を実施、有効回答は438票(回収率は100%)であった。その結果、OZの使用により清掃意欲が高まるなど一定の効果が確認され、特に1年～3年生までの児童に効果的であった。また、4年生以降の児童についてはOZを使用した授業プログラムと連動させることにより清掃意欲が高まることが確認された。

キーワード：学校清掃，清掃活動，家庭科，雑巾，環境教育

I. はじめに

本研究は2004年から学内で取り組んできた教育環境改善プロジェクトの継続研究¹⁾であり、昨年発表した第1報²⁾の続編である。筆者らは、2007年4月から家庭科教育と学校清掃活動を連動させた清掃活動プログラムである「おたまじゃくしぞうきんプロジェクト」(おたまじゃくし型雑巾の製作と活用プログラム)を作成し、2008年11月末までに、大学5校(本学と他大学4校、対象学生967人)および附属学校3校(小学校2校700人・中学校1校120人)と京都市内の協力校4校(小学校1校50人・高校2校350人・特別支援学校13人)の計12校(対象者2200人)で実施した。

第1報では、学校清掃活動の現状と課題について考察し、次に教職員が学校清掃活動の意義や目的について再考し家庭科と連動して学校清掃活動の改善に取り組む実践である本プロジェクトを立ち上げた経緯と2007年4月から8月までの実践を中心に報告した。本報告では2007年9月から同年12月までの本学附属桃山小学校(以下、桃小と略記)での実践とその成果と課題について述べる。

1) 京都教育大学家政科 2) 附属桃山小学校

Ⅱ. 活用実践 (2007年9～12月)

2.1 アンケート調査の対象と方法

桃小での実践の経緯を簡単に紹介すると、2007年5月に桃小4年2組において環境を意識した雑巾のデザインを考える授業を行い、その結果を踏まえ6月に大学でおたまじゃくしぞうきん(以下、OZと略記)のキット教材(OZプロットタイプ)を作成した。

次に、筆者らが担当する本学前期の「初等家庭科教育」および「中等家庭科教育Ⅱ」受講生と他大学「家庭科教育研究」受講生の計172人を対象として、OZプロットタイプの製作実習を行い500枚の雑巾を6月中に製作した。

各OZには製作者から子どもたちへのメッセージカードが添えられ、9月には桃小の全児童に配布された。さらに、第1報記載のビデオ教材と学習指導案を使用して全クラスでOZと清掃活動に関する授業実践(担任教員による指導、一部教育実習生による指導、45分)を行った。

実践から3ヶ月後の2007年12月3日～17日に、実践の成果を評価するために、桃小全児童を対象としたOZの使用に関するアンケート調査を実施した。調査対象者は調査当日の欠席者を除く438人(有効回答438票)で回収率は100%であった。

調査項目は、①使用頻度、②掃除場所、③使い方、④洗いかた、⑤干しかた、⑥大事につかっているか、⑦普段の掃除態度、⑧OZ導入後の掃除態度の変化、⑨変化した掃除内容、⑩好感度、⑪その理由、⑫改善したらよいと思う点の12項目である。

2.2 アンケート結果

2.2.1 使用頻度について

図1はOZの使用頻度を示したものである。全体では、あまり使っていない44%、使っていない20%と合わせて64%がほとんど使っていないと答えており、週1回以上使用しているのは36%に留まっている。

使用頻度が低い原因はいくつか考えられるが、第一の要因は、学年により清掃活動への取り組みに大きな差があった点である。具体的には、後述するように低学年ほど清掃活動に積極的に取り組むのでOZを活用する頻度が高く、中学年・高学年では積極性が減少するため、頻度が低下するのである。図1に示した学年別のデータをみると、1年や2年では過半数の児童がOZを週1回以上使用しているが、4年1組(12%)・5年(13.5%)・6年(9%)は1割程度であり、学年が上がるにつれ使用頻度は低くなる。

但し、デザインの作成から参加した4年2組は4年1組とは異なり、54%と使用頻度は高い。このことから、OZは低学年には概ね有効であるが、中学年以降ではどの程度プロジェクトに関ったかでその使用頻度に大きな差が生じるといえる。

第二の要因は子どもたちがOZを気に入る、大切にされた結果、使用頻度が下がったということである。この点についても後述する。

第三の要因はOZが汚れて使えなくなった場合に補充があるのか、明確でなかったため、児童が使用を控えた点である。この点は教員からの聞き取り調査で明らかになった。今回は実験

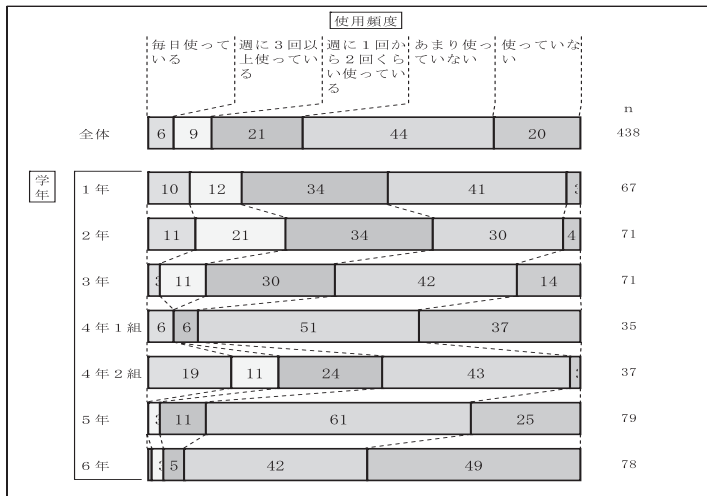


図1

的な試みであったので、OZの補充まで検討していなかったが、この点については今後の課題である。

2.2.2 掃除場所と使い方

図2はOZの清掃場所を示したものである。図1で使っていないと答えた児童も配布された当初に使用した経験があるため設問に答えている。OZは主に自分の机やイス、ロッカーを拭くのに使われている。学年別にみると、低学年や3年生では教室の棚の上や先生の机、黒板（ホワイトボード）など共通の場所を拭くことにも使われているが、4年生以上では共通の場所に使われる割合は少ない。その他の内容は、クラス全員の机など友人のものや窓、音楽室のピアノなど共通のものや場所であった。僅かであるが、自宅の机を挙げる児童もおりOZを自宅に持ち帰って使っていることも確認された。

図3は「OZを大事に使っていますか」と尋ねたものである。全体では87%の児童がいつも大事に使っていると答え、振り回したり投げたりするものは1割程度に留まっている。このことから、子どもたちはOZを大切なものとして受けとめ、使用していることがわかる。先述したように、使用頻度が低い理由のひとつがOZを大事にしまい、掃除を控えるようになった点である。この点は今後の改善点のひとつである。学年別にみると、1年～3年と4年2組

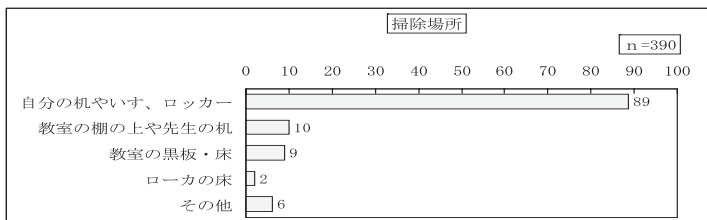


図2

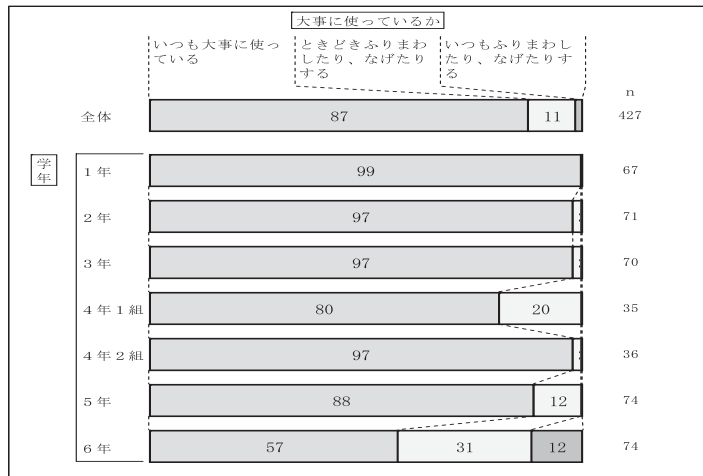


図 3

では大事に使う割合は 97% を超えている。4 年以上では OZ の学習に時間をかけて取り組むことにより大事に使う割合は上昇するといえるだろう。

図 4 は OZ の使い方を示したものである。全体では 4 割 (42%) が水拭き, 3 割 (28%) が乾拭き, 3 割 (30%) が両方の使い方をしてしている。学年別にみると, 低学年では乾拭きは 1 割弱であり水拭きをしている割合が多い。低学年児童は水拭きを嫌がらず進んで行うのである。一方, 乾拭きの割合が 68% と大きいのは 4 年 2 組である。4 年 2 組は OZ の使い方について考える時間を 2 時間設け, 目標を立てて掃除に取り組む活動を進めてきた。同時に, OZ の授業を担当した大学生から送られた OZ を大事にしたいという思いも強く, 布の傷みが少ない乾拭きを中心とする使い方にしたのである。このことから, 使い方については, 児童の学年や取り組みの内容に合わせて指導方法を選択する必要があるといえる。

図 5 は洗い方を示したものである。全体では「いつも洗う」は 58%, 「ときどき洗う」

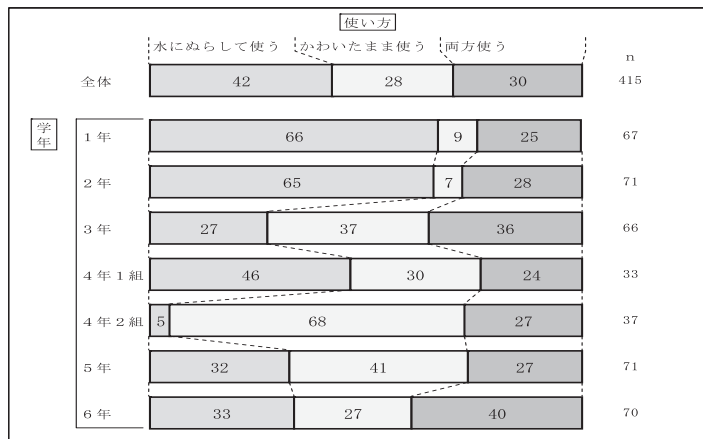


図 4

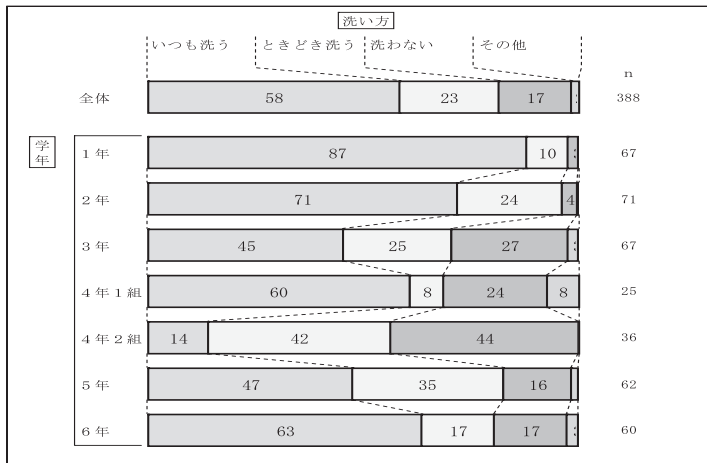


図5

23%、「洗わない」17%であり、8割の児童は手入れをしながら使っている。水拭きを嫌がらない低学年は「いつも洗う」割合が1年で87%、2年で71%と高くなっている。また、6年が63%と低学年に続いており、手入れについては高学年も洗う割合が高い。これに対して、乾拭きを中心としている4年2組は洗わない割合が最も高く、OZについた埃を払う程度の手入れで済ます児童が44%である。

図6は干し方を示したものである。全体では「いつも干す」が57%、「ときどき干す」が17%、「干さない」が26%である。洗い方とほぼ連動しており、洗ったら干す児童がほとんどである。ここでは干す場所の調査をしていないが、多くの児童は自分の机のフックに掛けて干している。

2.2.3 掃除態度とOZ使用後の変化

2005年から開始した桃小での継続的な参与観察では、熱心に清掃活動に参加するのは低学年児童であり、学年が進むにつれ積極性が低下する傾向にあった。図7は日頃の清掃態度につ

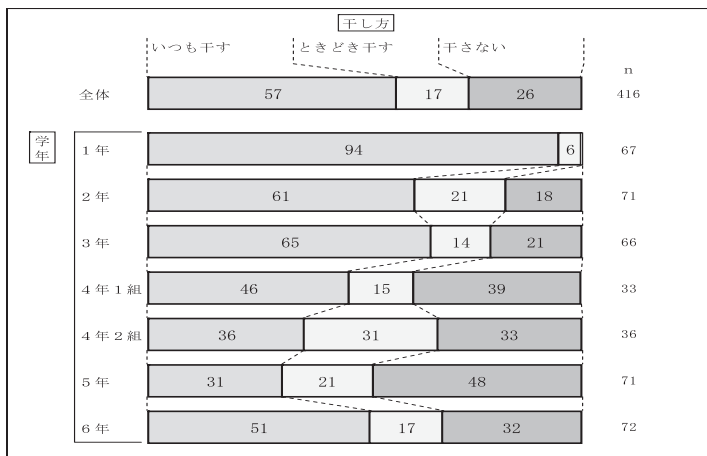


図6

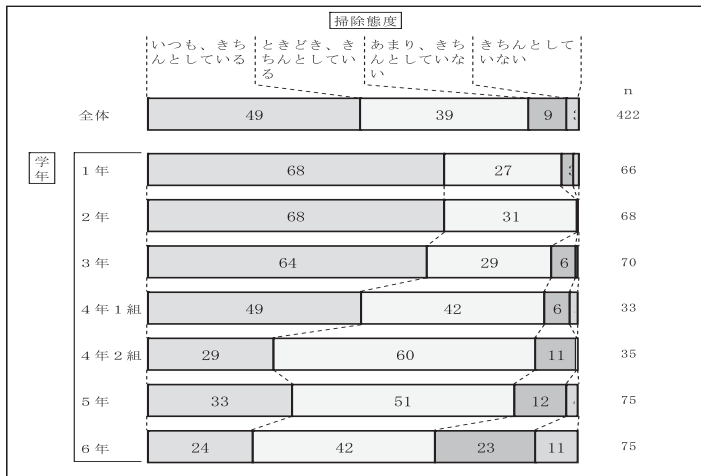


図 7

いて尋ねた結果である。清掃活動に対する積極性がみられる「いつもきちんとしている」児童は49%であり全体の半数であるが、学年別にみると、1年と2年が68%、3年64%、4年39%、5年33%、6年24%と学年が上がるにつれて大幅に減少する。このように、アンケート結果は参与観察の結果と一致し、子ども自身も自分の清掃活動への参加態度を客観的に評価していることが確認された。

また、性別で比較すると、女子が男子よりも熱心に取り組む傾向がある。「いつもきちんとしている」割合は女子53%に対し、男子43%で10ポイントの差がある。桃小の清掃活動では、全体として高学年より低学年が、男子より女子が熱心に取り組んでいるといえる。

図8はOZ使用後の清掃活動への参加態度を尋ねたものである。「前よりもそうじをかんばんようになった」と答えた児童は46%、「変わらない」52%、「前よりもそうじをきちんとし

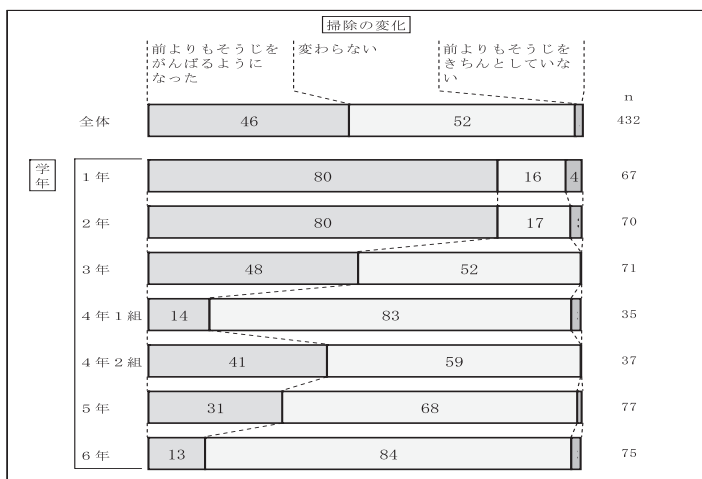


図 8

ていない」2%である。46%の児童が以前より積極的に清掃活動に参加するようになったと答えており、本プロジェクトに一定の成果が認められる。学年別にみると、1年と2年が80%、3年48%、4年2組41%、4年1組14%、5年31%、6年13%と、清掃活動への取り組みが積極的であった低学年や4年2組には大きな効果が認められる。性別でみると、以前より積極的に取り組むようになった割合は、男子43%、女子48%で女子が5ポイント高い。ここからも清掃活動に積極的に取り組む児童ほどOZは効果的であることがわかる。

図9は変化した掃除の内容である。やはり、拭き掃除の変化が大きい。拭き掃除13%、掃き掃除と拭き掃除の両方40%である。このことから、OZの導入により、拭き掃除だけでなく、掃除活動全体への取り組みが積極的になるといえる。

2.2.4 好感度とその理由

図10はOZに対する好感度を尋ねたものである。全体の68%の児童がOZを好きと答え、31%が好きでも嫌いでもないと答えており、嫌いのごく僅かである。OZの好感度は高いといえる。学年別にみると、1年91%、2年94%、3年75%、4年1組63%、4年2組86%、5年54%、6年22%であり、4年2組を除いて学年が進むに従い、OZを好む児童が減少する。このように、OZのデザインを好むのは低学年、中学年の児童であり、高学年では幼いと感じるのかもしれない。なお、好感度については性別による差が大きい。OZを好きと答えた男子は60%であるのに対し女子は76%と高く、女子の方がOZを好む傾向にある。

図11はOZを好む理由を尋ねた結果ある。最も多いのは45%の「使いやすいから」であり、次いで「かわいいから」36%、「大学生がつくってくれたから」29%、「手が入るから」28%、「自分のものだから」14%である。OZは「使いやすさ」と「かわいさ」即ち機能性とデザイン性から好まれていることがわかる。さらに、大学生が自分たちのために作ってくれた手作りのものという理由も大きい。また、OZを嫌いと答えたものは僅かであったが、その理由は、汚れた雑巾をさわるのが嫌といった、雑巾自体が嫌いというものであった。

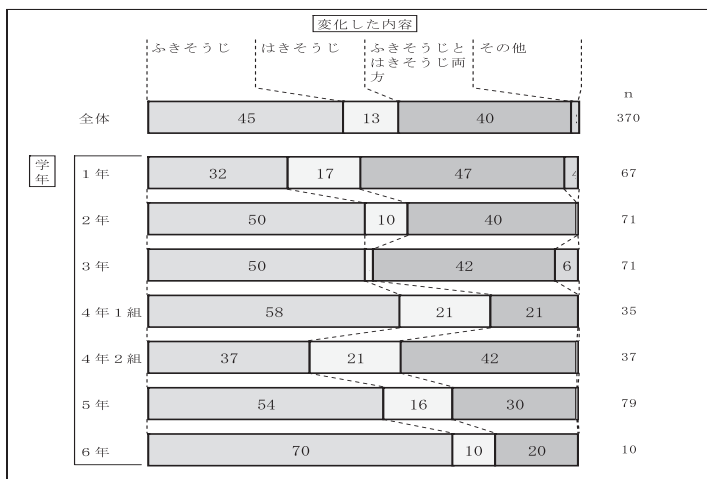


図9

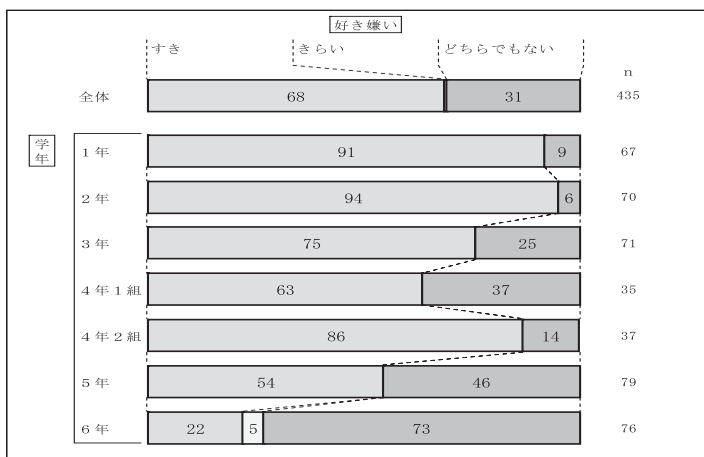


図 10

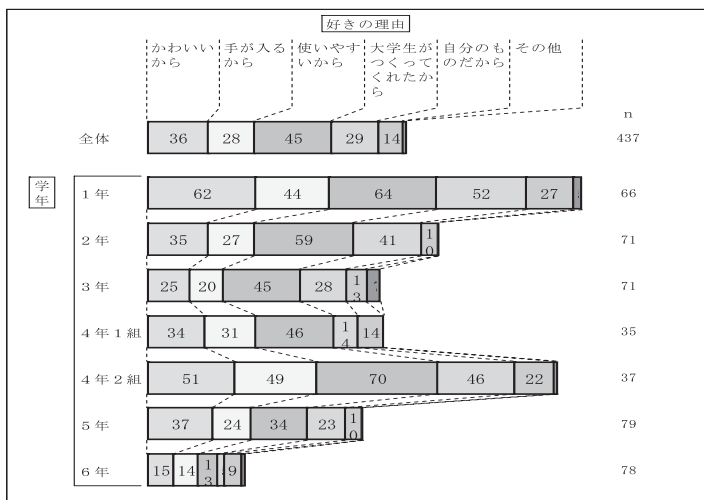


図 11

2.2.5 改善点

「目玉が取れやすいのでしっかりつけて欲しい」という意見が最も多く 18 人であった。これ以外はいずれも少数で、「違うキャラクターも作って欲しい」、「違う色のものを作って欲しい」、「もう少し小さ目のものが欲しい」などデザインに関するものと「もったいなくて使えない」という意見であった。

目玉の付け方については周囲をまつり縫いでかがるなどの改良が必要である。また、他のバージョンを作るなどデザインについても改善の余地が残されており、とくに「もったいなくて使えない」という点については雑巾として使えるようなデザインに改良する必要があるといえる。

Ⅲ. おわりに

アンケート調査の結果から、OZの使用により清掃活動への意欲が高まるなど一定の効果が確認された。とくに、OZは清掃活動に熱心に取り組む1～3年生までの児童に効果的であるといえる。また、4年生以降の児童についてはOZを活用した授業プログラムを実践することにより清掃活動への意欲が高まることも確認された。

課題は使用頻度が低い点である。この点については先述のように、①学年を考慮して高学年向けのOZ活用プログラムを作成すること、②雑巾として使用しやすいデザインに改良すること、③補充の仕組みについても考え、予備の雑巾を準備しておくことなどによって、使用頻度を高めることは可能である。さらに、児童から要望のあった異なるデザインのOZの製作や目玉の取り付けなどを改善することにより、OZの活用は促進されるものと思われる。

¹ 井上えり子・藤田加代・松本歩子・垣内良友・大嶺武也, 2006年, 子どもたちの生活とトイレ環境, 京都教育大学教育実践研究紀要, 第6号, pp.135-144. 井上えり子・藤田加代・水島あかね・前田明日香, 2007年, 子どもたちの生活とトイレ環境2, 京都教育大学環境教育年報, 第15号, pp.11-22. 井上えり子, 2006年, 大学における清掃美化活動と教師教育, 日本教師教育学会年報, 第15号, pp.92-102. 井上えり子, 京都教育大学における利用者参加型学校トイレプロジェクト, 2008年3月, 京都教育大学紀要, 第112号, pp.1-14.

² 井上えり子・榊原典子・藤田加代・大本久美子, 2008年, おたまじゃくしぞうきんプロジェクト1, 京都教育大学環境教育研究年報, 第16号, pp.7-21.

本研究は文部科学省平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)選定 京都教育大学「知的財産創造・活用力を育成する教員の養成」プログラムによるものである。